

「蓄積的疲労徴候調査」からみた看護職員の労働負担に関する考察

— S 国立大学病院における年度当初の実態調査から —

Cumulative fatigue in nurses working in the hospital.

信州大学医学部附属病院 東7階

：青柳美恵子

千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター：草刈 淳子

I. はじめに

近年医療サービスの質への関心が高まり、看護職でもケアの質の評価に関する研究や取り組みが始まっている。その中でケアの提供者である看護職員自身が心身ともに疲れていては、より質の高いケアを効果的に提供できない。看護職員の業務は、医療の進歩にともないますます複雑・高度化してきており、チーム医療の中での役割も複雑である。そのため臨床現場の看護職員は労働による心身負担を受けやすく、更に三交替勤務のため定期的に休息がとれず疲労が蓄積しやすい。そこで今回は年度当初の看護職員の疲労状況を主観の訴えから調査し、年齢、婚姻、職歴、職位、生活・仕事に関する主観（生活の満足感・仕事の忙しさ）別に比較検討した。

II. 調査方法

対象 S 大学医学部附属病院全看護職員395名中、看護部5名、看護助手13名を除く377名を対象とした。

回収数は350名（回収率92.8%）、有効回答数は338名（有効回答率96.6%）で、今回は看護師5名を除く333名を分析対象とした。

方法 自作の質問紙と「蓄積的疲労徴候インデックス」（越河，1985）¹⁻⁵⁾を用いた質問紙による留置調査とした。

期間 1996年5月22日～31日

内容 「蓄積的疲労徴候インデックス」（越河，1992）8特性74項目を使用した。特性の内訳は「気力の減退」9項目、「一般的疲労感」10項目、「身体不調」7項目、「イライラの状態」7項目、「労働意欲の低下」13項目、「不安感」11項目、「抑うつ感」9項目、「慢性疲労」8項目である。

応答結果は、各症状項目について「該当する」とした人の割合（質問項目別応答率）と、特性ごとの平均訴え率で整理した。平均訴え率の算式は次のとおりである。

$$\text{特性別平均訴え率} = \frac{\text{当該特性における訴え総数}}{\text{各特性の項目数} \times \text{対象人員数}} \times 100 (\%)$$

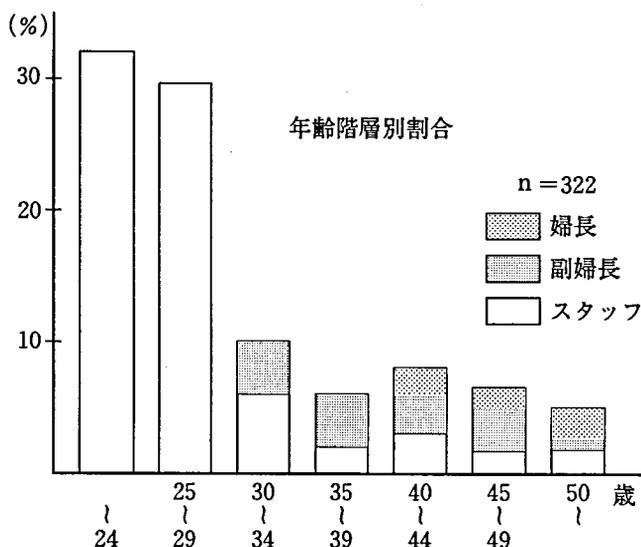
このほかに個人の基本属性、職歴、生活・仕事に関する主観（生活の満足感・仕事の忙しさ）についても調査した。

Ⅲ. 結果および考察

1. 分析対象者の背景

平均年齢は全体が 30.5 ± 9.3 歳，婦長 47.7 ± 4.0 歳，副婦長 39.7 ± 6.0 歳，スタッフ 26.9 ± 6.5 歳であり，看護職通算経験年数は 10.0 ± 9.1 年，当院勤続年数は 9.1 ± 8.6 年，現部署勤続年数は 3.8 ± 3.2 年であった。既婚率は27.8%で，20代が63.4%を占めている。 図一①

図一① 対象者の背景

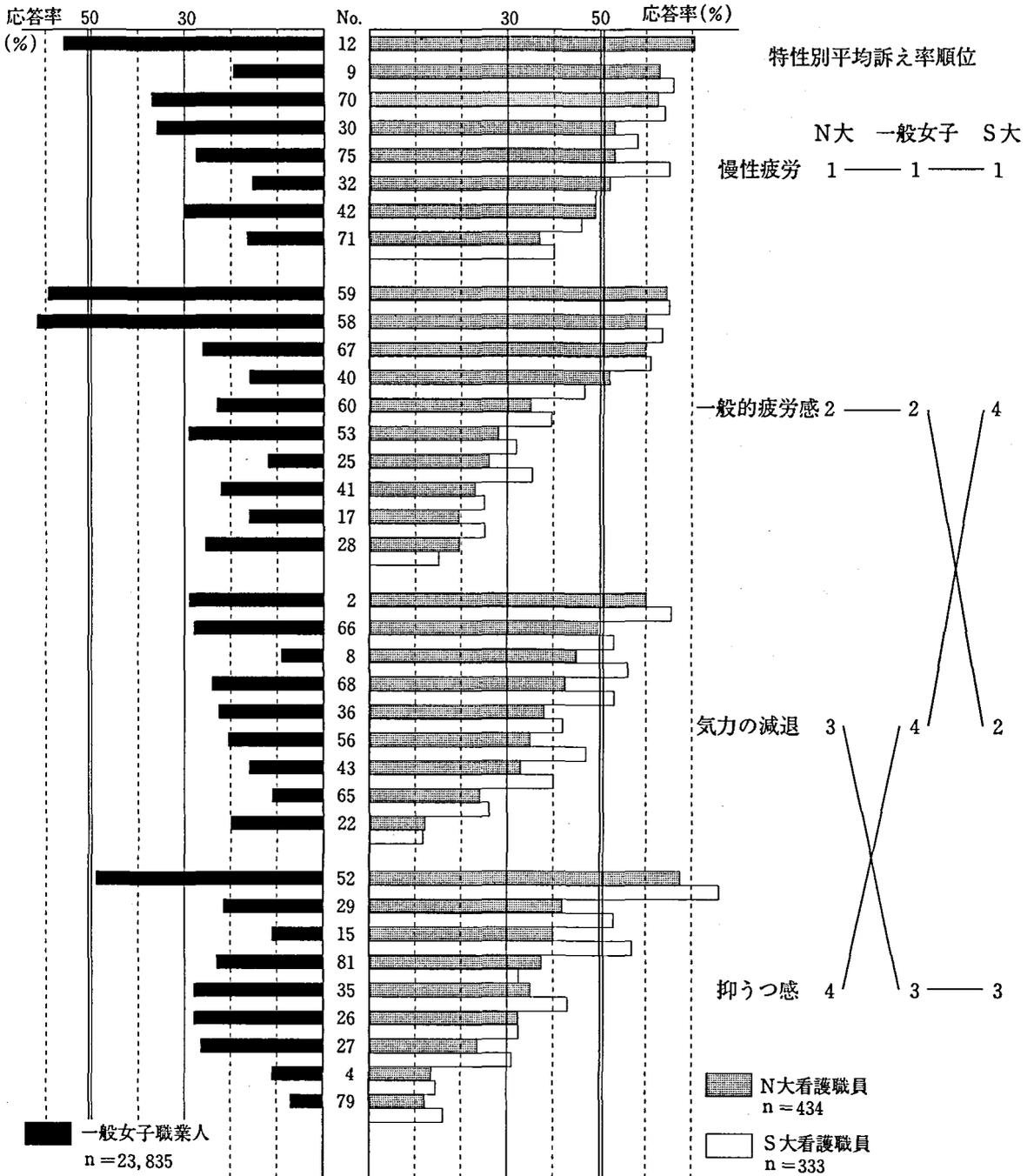


2. S大全体の傾向

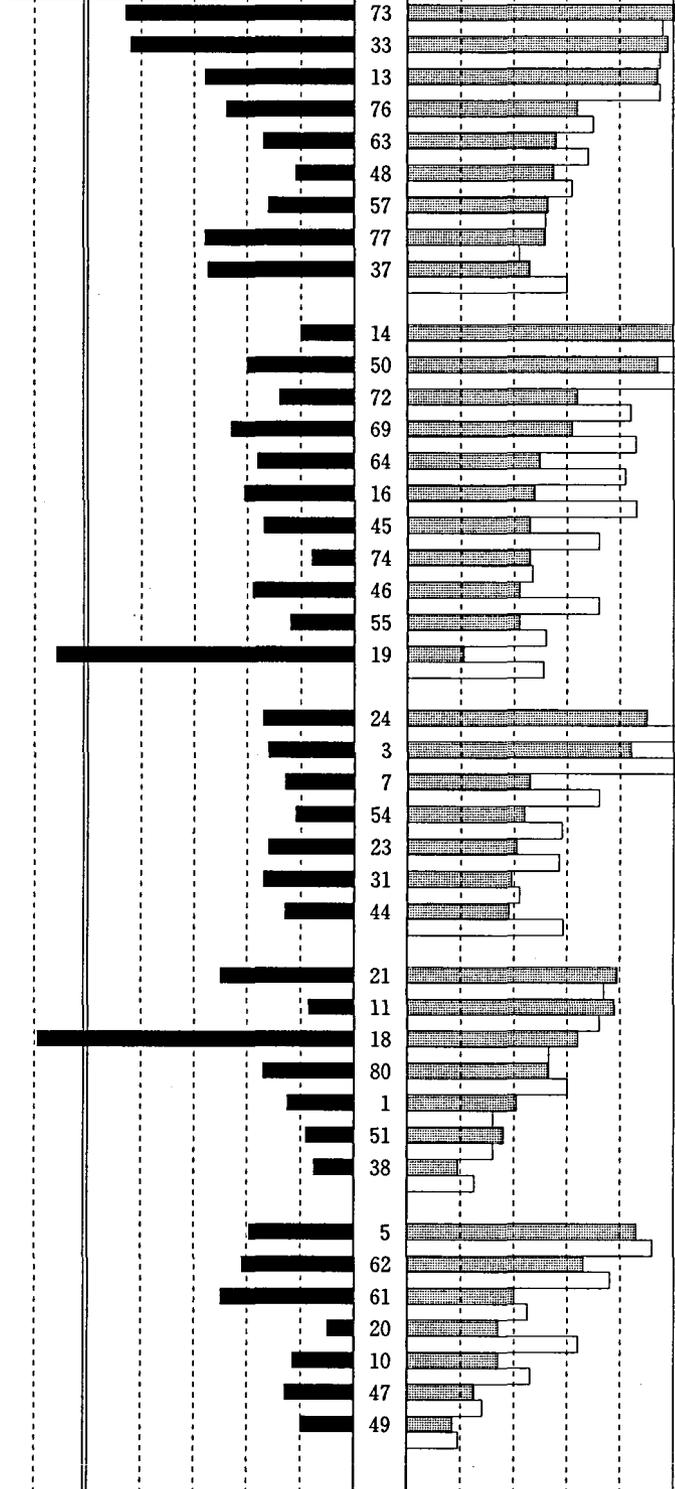
質問項目別応答率では，S大看護職員と先行研究のN大看護職員が高い応答率を示した項目はほぼ同じであった⁶⁾。また，1992年に越河らが発表した調査結果の中で，一般女子職業人が高い応答率を示した項目のほとんどにS大も高い応答率を示したが，No.19「ちかごろ，できもしないことを空想することが多い」と，No.18「このごろ，寝つきが悪い」の2項目は低く³⁾，N大の結果と同じであった。このことから，看護職に特徴的な傾向があることが示唆された。更に，S大の訴えはほとんどの項目でN大・一般女子よりも高く，74項目中応答率が50%以上の項目数がS大は17，N大は13，一般女子は5であり，S大の疲労度は高い傾向にあることが認められた。

特性別平均訴え率では，8特性の順位でどの群においても最も高いのは「慢性疲労」であり，S大は「気力の減退」「抑うつ感」の2特性が「一般的疲労感」よりも高い順位にあった。3群間の順位相関係数はS大-N大間が0.857，各大学と一般女子が0.881であった。 図一②

図一② 質問項目別応答率



応答率 (%) 50 30 No. 30 50 応答率 (%)



一般女子職業人
n = 23, 835

N大看護職員
n = 434
S大看護職員
n = 333

特性別平均訴え率順位

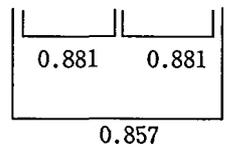
N大 一般女子 S大
労働意欲の低下 5 7 7

不安感 6 6 5

イライラの状態 7 5 6

身体不調 8 8 8

順位相関係数

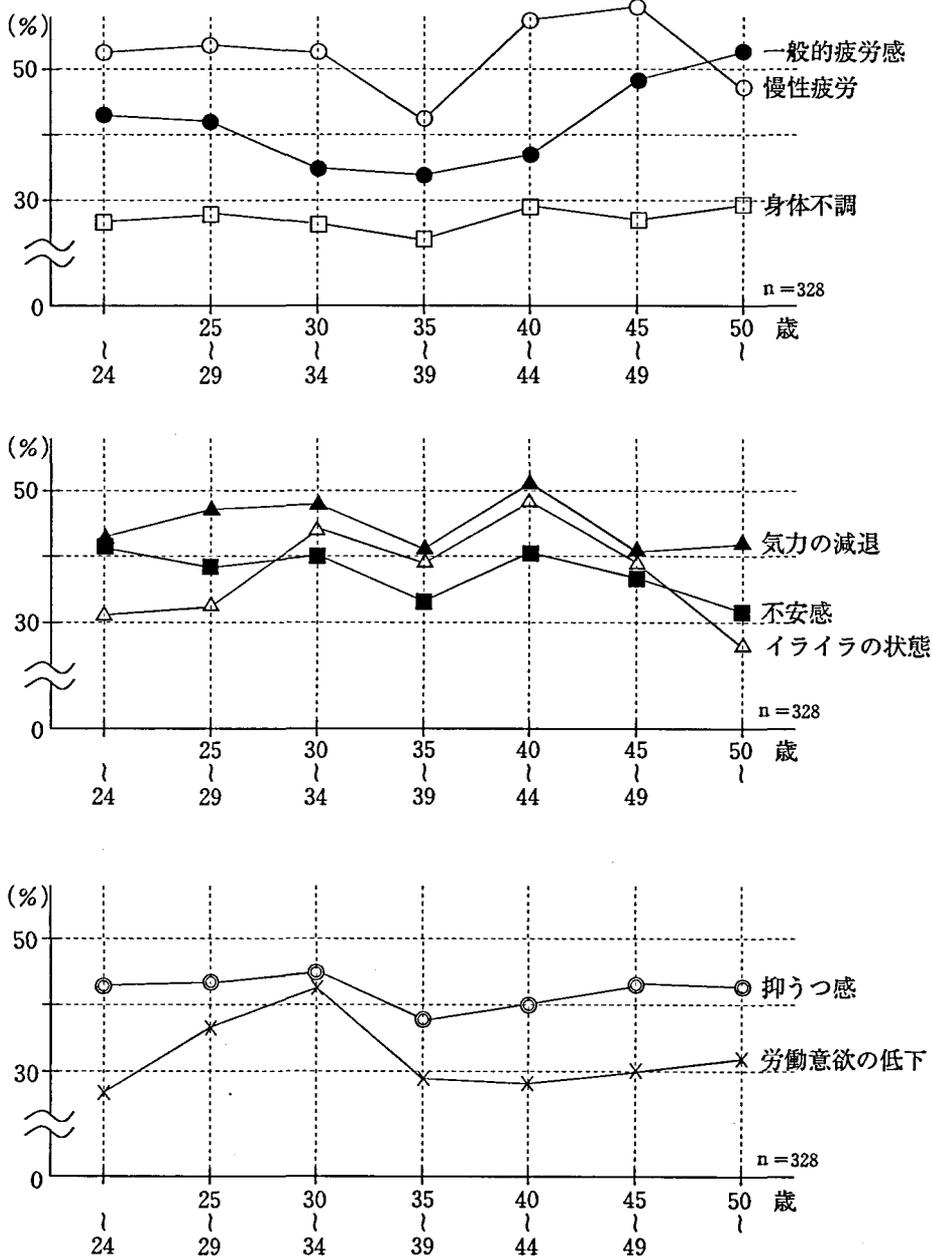


3. 特性別平均訴え率での比較

年齢階層別（5歳階級）では35～39歳が8特性全てにおいて訴えが低く、特に「慢性疲労」では50歳以上以外の年齢層と危険率5～1%以下で、「一般的疲労感」では30～34歳、40～44歳以外と5～0.1%以下で、「不安感」では24歳以下と5%以下で、「労働意欲の低下」では25～29歳、30～34歳と1～0.1%以下で有意差がみられた。

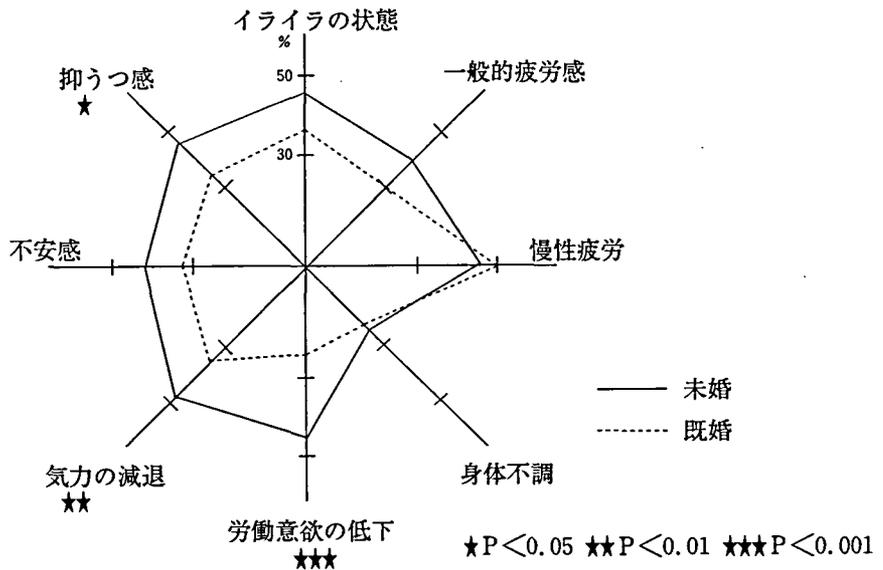
また、40歳以降の変化のパターンから、8特性は身体的側面、気力・情緒的側面、意欲的側面の3グループに類型化された。 図-③

図-③ 特性別平均訴え率（年齢階層別）



30代に限っては「慢性疲労」以外の7特性において未婚者の訴えが既婚者より高く、特に「労働意欲の低下」では危険率0.1%以下で、「気力の減退」では1%以下で、「抑うつ感」では5%以下で有意差がみられた。 図-④

図-④ 特性別平均訴え率 (30代婚姻状況別)



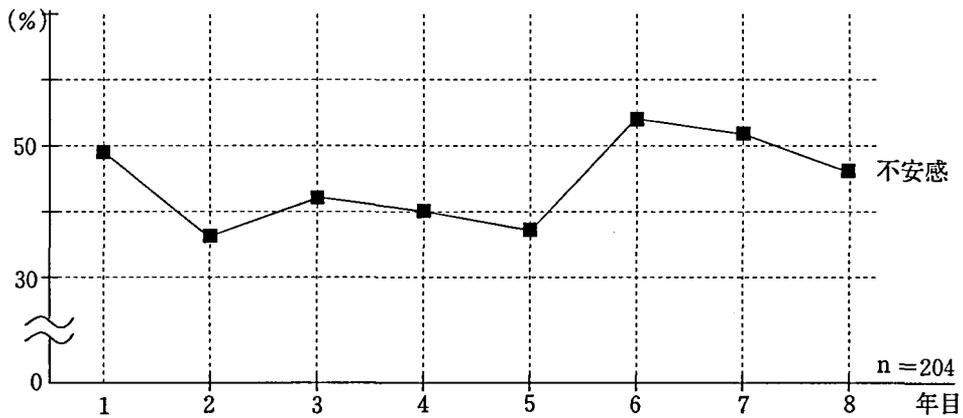
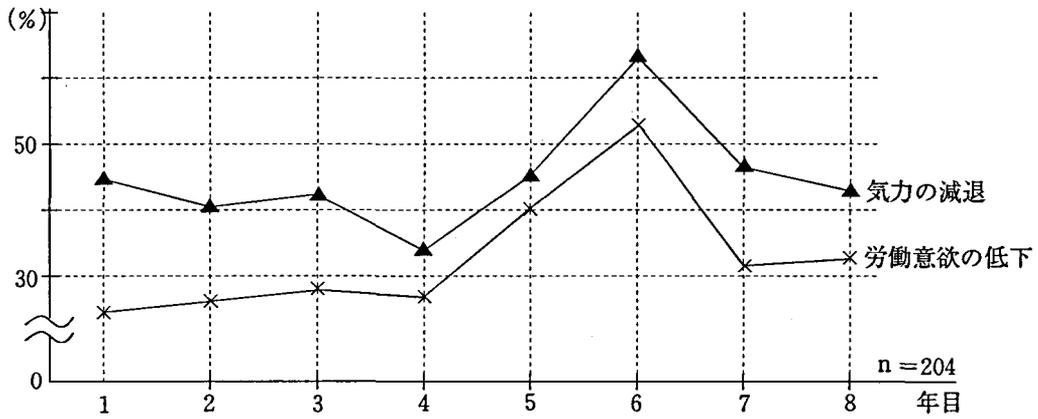
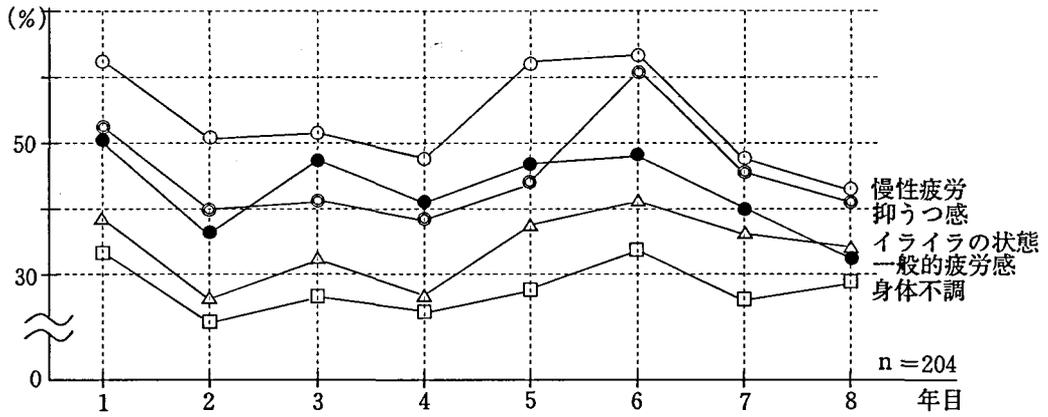
	未婚 人(%)	既婚 人(%)	合計 人(%)
30~34(歳)	25 (75.8)	8 (24.2)	33 (100)
35~39(歳)	7 (35.0)	13 (65.0)	20 (100)
合計 人(%)	32 (60.4)	21 (39.6)	53 (100)

通算経験年数別(1~8年目)では6年目が8特性全てにおいて訴えが高く、うち7特性では最高値を示した。また、2年目とは8特性全てにおいて危険率1~0.1%以下で、4年目とは「一般的疲労感」以外の7特性において5~0.1%以下で有意差がみられた。

1年目は「気力の減退」「労働意欲の低下」以外の6特性において高い訴えを示し、2年目とはその6特性で危険率5~0.1%以下で、4年目とは「労働意欲の低下」以外の7特性で5~1%以下で有意差がみられた。

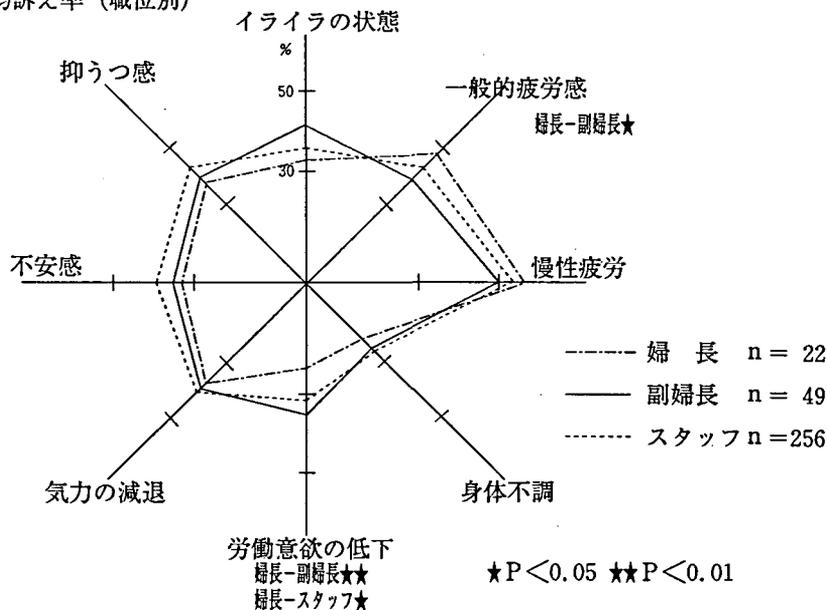
また、8特性は1年目と6年目が高い身体的側面と「抑うつ感」「イライラの状態」、6年目が高い「気力の減退」「労働意欲の低下」、1年目・6年目が高く5年目が低い「不安感」の、年齢階層別とは異なる組合せで3グループに類型化された。 図-⑤

図一⑤ 特性別平均訴え率 (通算経験年数別)



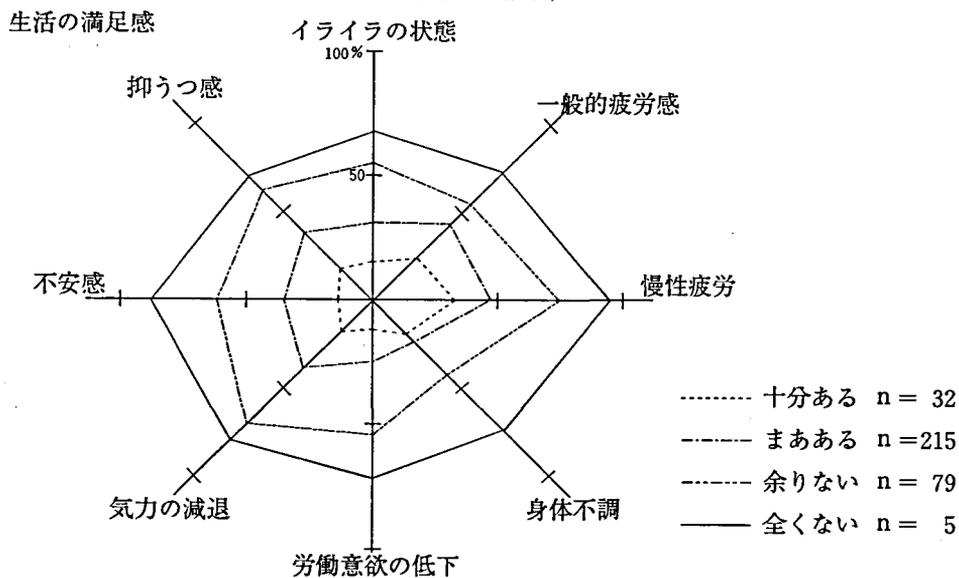
職位別では、「労働意欲の低下」において副婦長の訴えが危険率が1%以下で、スタッフが5%以下で婦長に比べて有意に高く、「一般的疲労感」においては婦長が副婦長に比べて危険率5%以下で有意に高かった。「イライラの状態」においては副婦長の訴えが高かったが、有意差はみられなかった。 図-⑥

図-⑥ 特性別平均訴え率（職位別）



生活の主観別で比較すると、生活の満足感が「十分ある」と回答した群の疲労の訴えが最も低く、次いで「まあある」「余りない」の順で、「全くない」が最も訴えが高かった。 図-⑦-a

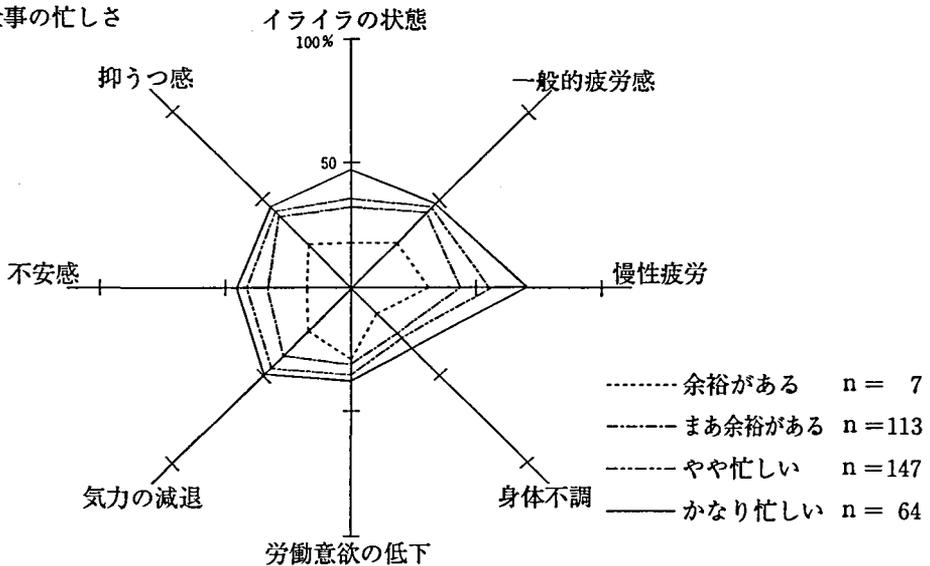
図-⑦-a 特性別平均訴え率（生活・仕事の主観別）



仕事の主観別では、仕事の忙しさについて「余裕がある」と回答した群が最も訴えが低く、次いで「まあ余裕がある」「やや忙しい」の順で、「かなり忙しい」が最も訴えが高かった。

図一⑦-b 特性別平均訴え率 (生活・仕事の主観別)

図一⑦-b



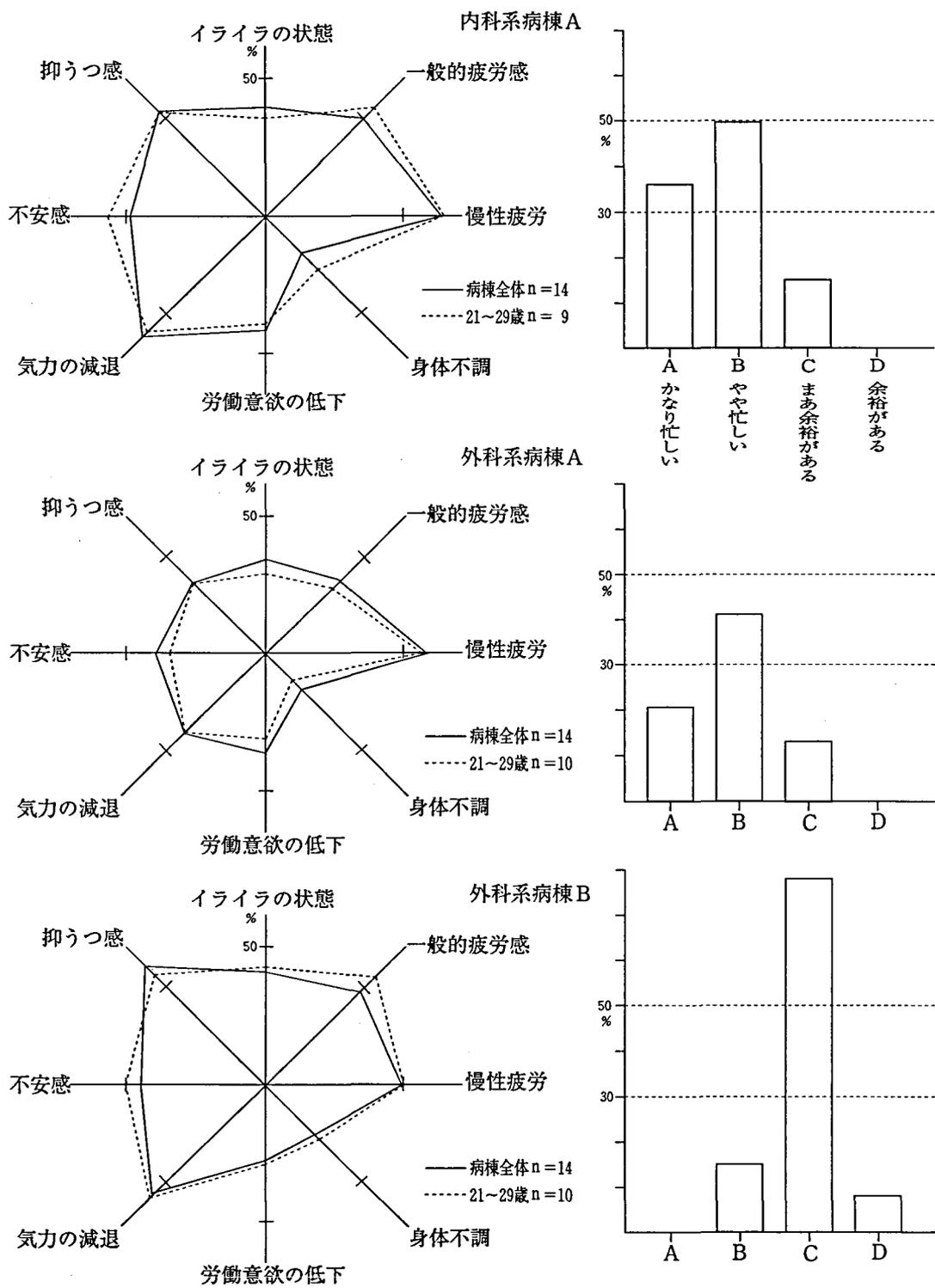
仕事の忙しさの主観で最も疲労の訴えが高かった「かなり忙しい」の群でも「慢性疲労」以外の7特性の訴え率は50%以下であったが、生活の満足感の主観で2番目に訴えの高かった「余りない」の群で、すでに「身体不調」以外の7特性の訴え率が50%以上であり、生活の満足感と疲労との関連が強いことが示唆された。

また、仕事の忙しさの主観で、「やや忙しい」「かなり忙しい」と回答した群は「余裕がある」「まあ余裕がある」と回答した群に比べて、生活の満足感の危険率5%以下で有意に低かった。このことから仕事の忙しさと、生活の満足感の主観は関連が深いといえる。

仕事の忙しさの主観で部署別比較をすると、60%以上の看護職員が「かなり忙しい」「やや忙しい」と回答した内科系病棟Aと外科系病棟Aを比較すると、内科系病棟Aでは訴えが高く、特に「一般的疲労感」「慢性疲労」「気力の減退」「不安感」「抑うつ感」で高かった。外科系病棟Aでは「慢性疲労」以外の訴えは高くなかった。また、「余裕がある」「まあ余裕がある」の回答が80%以上の外科系病棟Bは忙しさの訴えが多い外科系病棟Aよりも「慢性疲労」「労働意欲の低下」以外の6特性で訴えが高かった。

各部署の20代のみ訴えは、「一般的疲労感」と「不安感」でやや高くなる傾向もみられるがほぼ病棟全体と類似しており、各部署の疲労の傾向に関して所属職員の年齢による影響は少ないといえる。このことより、仕事の忙しさの主観と疲労の訴えは関連が深い、必ずしも一致せず、他の要因の関連が示唆された。 図一⑧

図一⑧ 特性別平均訴え率（仕事の忙しさの主観・部署別）



IV. 結 論

1. 質問項目別応答率において、看護職に特徴的な傾向があることが示唆された。S大看護職員の疲労の訴えはN大・一般女子よりも高かった。3群間の8特性の順位には強い相関がみられた。
 2. 年齢階層別では35～39歳の訴えが低く、特に「慢性疲労」「一般的疲労感」「不安感」「労働意欲の低下」で有意に低かった。30代に限定すると未婚者の訴えは既婚者に比べて高く、特に「労働意欲の低下」「気力の減退」「抑うつ感」で有意に高かった。8特性は変化のパターンから身体的側面と、気力・情緒的側面、意欲的側面の3グループに類型化された。
 3. 通算経験年数別では1年目、6年目が2年目、4年目に比べて有意に高い訴えを示した。8特性は年齢階層別とは異なる組合せの3グループに類型化された。
 4. 職位別では副婦長とスタッフが「労働意欲の低下」において訴えが有意に高く、「一般的疲労感」においては婦長が有意に高かった。
 6. 「生活の満足感」と「仕事の忙しさ」の主観は疲労と関係が深い、「仕事の忙しさ」と疲労の訴えが一致しないこともあり、他の要因の関連が示唆された。
- 以上、今年度当初に看護職員の労働負担の主観的評価を調査した結果、かなり高い疲労度であることが認められ、年齢、婚姻、職歴、職位、部署、生活・仕事に関する主観別に特徴があることが明らかになった。今後時期を変えて更に検討していく必要があると考える。

V. 引用文献

- 1) 越河六郎、藤井亀：「蓄積的疲労徴候調査」(CFS I)について、労働化学, 67(5), 229-246 1987
- 2) 越河六郎：CFS I (蓄積的疲労徴候インデックス)の妥当性と信頼性、労働化学, 67(4) 147-157, 1991
- 3) 越河六郎、藤井亀、平田敦子：労働負担の主観的評価法に関する研究(1)CFS I (蓄積的疲労徴候インデックス)改訂の概要、労働化学, 68(10), 489-502, 1992
- 4) 越河六郎、藤井亀、平田敦子：労働負担の主観的評価法に関する研究(2)CFS Iの統計的解析、労働化学, 69(1)1-9, 1993
- 5) 越河六郎、藤井亀、平田敦子：労働負担の主観的評価法に関する研究(3) 年齢階層と特性別平均訴え率、労働化学, 69(3), 79-100, 1993
- 6) 横山恵、草刈淳子：「蓄積的疲労徴候調査」からみた看護婦の労働負担感—N国立大学病院勤務看護婦の年度当初における実態調査から—日本看護研究学会雑誌, 19 臨時増刊216, 1996

VI. 参考文献

- 1) 小木和孝他：労働負担の調査、労働化学叢書72, 労働化学研究所, 1984
- 2) 田中茂、鈴木美代：新版産業保険指導論、保健学口座14巻, メヂカルフレンド社, 1991